

牧師室から (2021.5.2)

5月1日はメーデーであるが、フランスでは大切な人にスズラン（ミユゲ）を贈る日である。スズランは可憐な花なので、好きな方も多いのではないかと思う。イギリスの神学者（私の記憶ではバークレーだったと思う）がキリスト者の麗しい在り方をこの花にたとえて言っていた記憶がある。つまり、白いのは清楚であり、また小さく下を向いているのは謙遜であるという。

私共の教会の庭にはドウダンツツジがあり、この間まで白い下向きの小さなスズランに似た花をいっぱい咲かせていた。その意味では、これも教会にはふさわしい花と言えるのではないかと思った。

でも虫にしてみれば、小さくて下を向いている花は、出入りが難しいのではないか。蜜を採り、受粉するにはかなり技巧を要するのではないかと思う。また、スズランは可憐な割には毒があるというが、これは身を護るための手段である。

因みにこの花の名前は、ドイツ語でも「五月の小さな鐘」という意味であるので、やはりこの時期にふさわしい花なのであろう。私の幼い時の記憶に、母親の小さな透明の香水の瓶の中にスズランが入っていたことがある。母は、若い時分より香水や化粧などほとんどしなかった人であるので、余計鮮明に覚えている。その頃の他の記憶と言え、小言をたらたら言われたことに、ひたすら耐えたことぐらいしか思い出せない。しかし、腰が曲がって弱っているこの頃の母の姿を見ると、今は聞けないその時の小言が懐かしくなる。

(鈴木淳一牧師)

